# 2016 フォトキナ 報告

# 2016 PHOTOKINA REPORT

# 市川 泰憲

Yasunori ICHIKAWA

Author JCII Camera Museum Steeringcommittie member

写真業界にとっては恒例の「フォトキナ2016」が、 去る9月20日~25日までドイツ・ケルンの見本市 会場であるケルンメッセで開催された。

第1回のフォトキナ開催は1950年で、今年で34回目となる。カメラもすっかりデジタル化され、その製品サイクルも早くなり、1年おき偶数年開催のフォトキナでは、作る側にとっても、ユーザーにとっても待ちきれないという現実もあるが、今年の展示からは、いままでにない動きも出てきた。ここでは各社の新製品を見るなかから、明日



入口前には昨今の情勢から、手荷物検査のテント小屋が設 営されていた。過去に例のないことだ(撮影は19 日朝)



ケルンメッセ正面入口。左側にはニコンのキーミッション360の映像をゴーグルとイヤホーンを使って見せる特設コーナーが設けられていた(撮影は会期中の夕方終了時)

のカメラ技術と業界の行方を考察することにする。 今回は、「Imaging Unlimited = イメージングに 限界はない」という統一テーマのもとに、来場者 は191,000人で前回より4%増、出展社は42ヵ国から983社、そのうち海外からの出展が69%という ファイナルレポートが、フォトキナ事務局より発 表されている。写真業界のこれからを考えながら、

それぞれの分類に従って全体を概観してみよう。

# ●ライカカメラ社

まず最初に、フォトキナはドイツで開かれているので、最も気になるのはライカだ。ライカカメラ社のブースは前回と異なり大きな変化を見せた。前回2014年は1号館の前1/3を製品の展示スペース、奥をライカギャラリーとしたのだが、今回は1号館すべてがライカギャラリーとなり、ライカ製品の展示スペースは2号館のフロア1の入口にこじんまりと設けられていた。

そしてライカカメラ社は初日20日の開館と同時のライカギャラリーのオープニングセレモニーを行ったが、社主のDr. アンドレアス・カウフマン氏とライカカメラ社社長のオリバー・カルトナー氏の簡単な挨拶に続き、ライカギャラリー責任者としてカウフマン氏の奥さんであるカリン・レーン・カウフマ



ライカギャラリーのオープニングで挨拶するライカカメラ社の社主Dr. アンドレアス・カウフマン氏



ライカギャラリーではライカで撮られた15シリーズ、400作品が展示された



ライカゾフォート。デザインはライカカメラが 行った。製造は中国と底面に書いてある



2号館のライカカメラ社展示ブース。裏に一般カウンターがあり、ゾフォートや新製品の交換レンズをショーケースに展示



ポラロイドのブース。コンパクトデジカメの展示がなくなり、商品幅が狭くなった感じは否めない

ン氏によるギャラリーの作品紹介、作家紹介にほ とんど時間が費やされ、最後にカウフマン氏が登 場し、新製品であるインスタントカメラ「ゾ フォート」をちらっと見せるだけの発表だった。

このゾフォートは、富士フイルムのinstax miniのフィルムを使い、ボディカラーは、ミント、オレンジ、ホワイトの3色あるが、会期中はショーケースでの展示にとどまり、デモンストレーションは行われなかった。すでに日本でも11月には34,560円で発売されることがアナウンスはされているが、正式にはフォトキナ開幕直前の9月15日にヨーロッパの直営店の開店に合わせて発表され、フォトキナで初お目見えということだった。

ライカカメラ社は、このところ急速に業務内容を拡大させており、2016年2月のCP+開催の時期には中国のファーウェイ(HUAWEI)との技術提携を発表してライカレンズを搭載したスマートフォン「HUAWEI P9」を登場させている。

また、今回のフォトキナ開催中の9月23日には、ファーウェイと共同で研究開発センター「Max Berek Innovation Lab (マックス・ベレク・イノベーション・ラボ)」を設立することを発表している。この研

究所は、画像、モバイルデバイスの撮像品質を向上させるため、光学系とソフトウェアベースの技術のさらなる発展を目指すとのことだが、今後どのように進展していくのだろうか。

なおプロ向けのプレスレリーズによると、ライカのフルサイズミラーレス機の SL 用交換レンズとして、ズミルックス SL50mmF1. 4ASPH.、アポ・ズミクロン SL75mmF2ASPH.、アポ・ズミクロン SL35mmF2ASPH.、スーパー・バリオエルマー SL16  $\sim$  35mmF3. 5-4. 5ASPH.、アポ・バリオエルマリート SL90  $\sim$  280mmF2. 8-4 の 6 本が新製品として発表されていた。

#### ●ポラロイド

2008年に倒産したポラロイド社は、カメラ、メガネなど、複数の社がポラロイドのブランドを引き継いだが、2013年1月のCESでアメリカのSAKAR社がポラロイド製品を発表展示したときは、旧ポラロイド社の創始者であるDr. ランドの肖像写真、歴代のポラロイドカメラなどを展示して、いかに旧ポラロイド社の流れをくんだ製品(企業)であるかということを強くアピールして、コンパクトタイプとレン



コダックアラリスはフォトキオスクとフィルムを展示した



左のブースのフィルムコーナー部分をクローズアップ



JKイメージング社のブース。一見するとコダック社のブースと間違えるが、Kodakの商標使用権をもった別会社である

ズ交換式のデジタルカメラ、タブレットPC などを 複数展示していたが、2015年では CUBE というアク ションカメラが加わり、さらに 2016年 CES ではコ ンパクトデジタルカメラに変わり 3D プリンターや ドローンが展示されていた。

いずれにしてもコンパクトデジタルカメラ市場の 急速な衰退の影響は避けがたいものがあるようで、 今年のフォトキナブースでの展示では、CUBE、Zink プリンター内蔵のデジタルカメラ Snap などが主に なっており、製品のバリエーションは少なく、一頃 ほどの勢いは感じさせない。

なおブースは、ポラロイドとして出展していて、 ポラロイド製品のイメージは、すっかり新会社が引き継いだ感じであり、すでに日本のCP + 2016 にも 出展していた。

## ●コダックアラリス

イーストマン・コダック社の流れをくむ会社だが、2016CES の場ではかつてライセンスしたアクションカメラ、インクジェットペーパーやインク、ランプなどコダックブランドのさまざまな製品を展示していたが、フォトキナの場では、セルフプリンターのフォトキオスクを設置し、銀塩フィルムを現物展示するのにとどまった。

# ●コダック(JK イメージング)

コダックブランドのアクションカメラを扱うのは JKイメージングだ。2013年1月のCESでアメリカの SAKAR 社がポラロイド製品を展示したときに同じ ブースでコダックブランドのストロボや三脚など 数々の写真用品が発表されていた。

その後マイクロ4/3のカメラなどがJKイメージングに引き継がれ、同時に登場したのがアクションカメラのPIXPROだ。PIXPROは当初180°撮影可能のモデルであったが、2台組み合わせたSP360°モデル、4Kモデル、水中撮影が可能なモデルなどと製品の幅を広げている。日本での販売は、マスプロアンテナが手がけている。

#### ●ニコン

この時期のニコン新製品は、アクションカメラの Key Mission80、Key Mission170、Key Mission360 の3機種だ。1月に開催されたアメリカのCESでは、 Key Mission360の1機種だけの発表であったが、 新たに2機種が追加されたことになる。

ニコンのアクションカメラに注ぐエネルギーは 相当なもので、ケルンメッセ正面入口わきには "Key Mission 360 VR Experience" と名付けた体



ニコンヨーロッパ社長の土田貴実氏がKeyMissionを解説



直近の新製品ニコンD3400のコーナー

験コーナーを特設していた。なお、 $80 \cdot 170 \cdot 360$  の数値は撮影画角を表していて、それぞれ1 m、10 m、30 m までの水中撮影も可能。さらに $170 \cdot 360$  モデルは4 K 動画にも対応している。

もちろん展示会場ではKey Missionカメラだけでなく、一眼レフがメインに展示されたが、ニコンD5を3月、D500を4月、D3400を9月に発売したばかりだから、短期間にこれ以上カメラの新製品を作りだすのはむりということになるのだろう。

またブース出口付近にビジネスコーナーを設け、フォトキナ開催初日の9月20日に買収を発表したばかりの英国の映像機器ロボット制御会社、Mark Roberts Motion Control 社のカメラ制御機器を実写映像とともに展示していた。これは一見すると監視カメラのようだが、いわゆる判定カメラシステムのようで、制御機器内にはニコンD5が組み込まれている。なおフォトキナ直前の9月16日には、3Dプリンターを手がける米国のベンチャー企業、Carbon3D社へ約10億円の出資を発表するなど、ニコンはこの時期急速に映像機器の多角化と産業機器事業の強化を目指しており、会場入口でアクションカメラKey Mission360° VR(Virtual Reality)動画の展示コーナーの設置も、その一環だと考えられる。



左からニコンKeyMission170、360、80 (2色ある)



正面入口のKey Mission 360 VR Experience コーナー



Mark Roberts Motion Control社のカメラ制御機器

#### ●キヤノン

キヤノンは、「いままでのミラーレスに満足しているか?」というキャッチで、EVF内蔵のAPS-C判



キヤノンブースの入口



キヤノンはEOS M5とEOS 5D MarkIVが新製品(プレスカンファレンスにて)



来て見て、とキヤノンはハードよりソフトを重点に展示

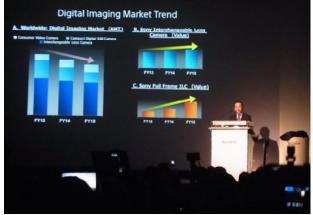
ミラーレス機「EOS M5」をフォトキナ開幕直前の9月15日に登場させている。有効画素数約2,420万画素の全画素が撮像と位相差AFの両方を兼ねて機能するため、AF・AE追従で最高約7コマ/秒の連写を実現した。EOS M5は、シャッターを押したときのレスポンスが速く、従来のEOS Mとは格段の進歩を見せ、同時にEF-Mレンズ初の×8.3高倍率ズーム「EF-M18~150mmF3.5-6.3 IS STM」を発表、キヤノンのミラーレスへの意気込みを感じさせる。今後、APS-C判の一眼レフとミラーレス機をどのように発展させていくか注目される。

会場の展示は、ミラーレスのEOS M5と一眼レフのEOS5D Mark IVがメインであり、今回の展示はハードより映像を取り込んだソフトに重点を置いたとされ、基本的にはキヤノンエキスポなどで披露されていた新技術の展示が多く、すでにサービスが開始されているカメラで撮影後の画像をクラウドにアップするサービスの実演や、通常のインクジェットプリンターピクサスに加え、業務用のインクジェットプリンターである「ドリームラボ5000」の高品位プリントを見せるなど、キヤノンらしく幅広い画像関連機器の展示が行われた。

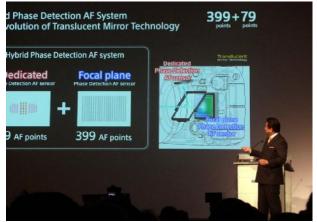
#### ●ソニー

ソニーは、2006年にコニカミノルタから $\alpha$ ー眼レフシステムの製造権を譲り受けてから、2016年で10周年を迎えている。ここ数年来のソニーの製品動向を見ると、ミラーレス機の $\alpha$ 7シリーズが好調であることにより、ややもすると一眼レフから手を引くのではないかという見方も一部にはあったが、その期待をみごとに裏切り、一眼レフのフルサイズ4、240万の高画素で、12コマ/秒の連写速度を誇る「ソニー $\alpha$ 99 II」を発表した。この $\alpha$ 99 IIの撮像素子は、すでに $\alpha$ 7 R IIで実績のある裏面照射タイプ CMOS を使用し、ソニー独自のトランスルーセントミラー(部分透過ミラー)技術、さらにAF・AE性能を向上させ、新開発のフォーカルプレンシャッターユニットを搭載するなどして12コマ/秒を実現したという。

一眼レフで高速連写機というと、ニコン D5 が 10  $\sim$  12 コマ/秒、キヤノン EOS-1DX Mark II が 14 コマ/ 秒を誇っているが、いずれも画素数 2,000 万クラス であり、ソニーは独自のトランスルーセントミラーを使用ではあるが、4,240 万の高画素を 12 コマ/秒 で撮影できるのは注目される。



業界全体でカメラの業績は低下しているが、ソニーは好調に伸ば していると解説(プレスカンファレンスにて)



ソニー $\alpha$  99  $\blacksquare$  の高画素フルサイズで 12 コマ / 秒を達成した AF とトランスルーセントミラー技術について解説



ソニーのブース

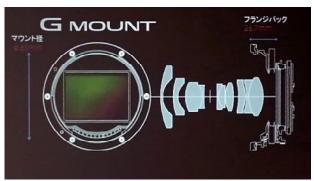
このフルサイズ裏面照射タイプ 4, 240 万画素 CMOS は、すでに $\alpha$  7R  $\Pi$  とサイバーショット RX1R  $\Pi$  に使用され、新たに $\alpha$  99  $\Pi$  にも採用されるが、過去のフルサイズセンサーのように外販されていない。そして $\alpha$  7 用 E マウントのパテントフリーなども含めて、ソニーの半導体含みのカメラ戦略が見え隠れし、カメラ分野でソニーの攻めの姿勢を十分に感じさせる。

#### ●富士フイルム

今回のフォトキナで、最も驚きをもって迎えられたのは「フジフイルム GFX 50S」の登場だろう。富士フイルムの中判デジタルカメラへの参入はある程度予想できたことだが、ミラーレスの中判カメラで、センサーは43.8×32.9mm、5,140万画素 CMOS、フランジバック 26.7mm、バックフォーカス 16.7mm、将来の1億画素の撮像素子に耐えられる高解像対応の交換レンズも6本発表された。

発表時のキャッチコピーは"Fujifilm has a just come Back"であり、明らかに営業写真館などに向けてのメッセージだが、当然のこととしてハイアマチュアもその視野のなかに入れている。

今回の製品化にあたっては中判ミラーレス機用として低シャッター音で低振動の最高速度1/4000秒



GFXはフランジバック26.7mm、バックフォーカス16.7mm



新製品のソニー $\alpha$ 99 II を使ってモデルさんの実写を体験できたが、自分のメディアの差し込みはできなく、撮影画像データは持ち帰ることはできない

のフォーカルプレンシャッターを新規に開発して搭載。またアクセサリーシューにセットできるペンタプリズム状に一体デザインされた EVF は取り外し可能で、ボディ右上の液晶ディスプレーは電源を OFFにしても、黒地に白く文字が表示されるので、ダイヤル式の撮影感度、シャッター速度数値などと合わせて、かなり視覚的に配慮された設計だ。

富士フイルムは10年ほど前には国内デジタルカメラ分野で事実上撤退した経緯もあるが、その後、ミラーレス機で好評を得て、この時期の中判GFX



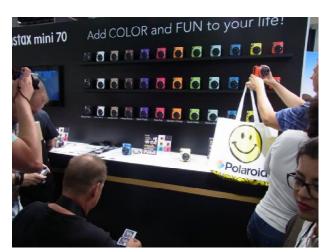
蜷川実花の極彩色の大型プリントが鮮やかな富士フイルムGFXのコーナー(人が切れる瞬間をかなり待って撮影)



妙に納得したキャッチ(プレスカンファレンスにて)



インスタントフィルムの将来はスクエアが標準だという



カラーボディのコーナーの前で試写する人々







への復帰など目覚ましいものがある。

フォトキナ会場での発表会のなかでは、2020年の東京オリンピックを目指すとアナウンスされたが、これは単なる次世代機に向けた技術目標ではないようで、X シリーズでデジタルカメラシステムの再構築の成功、オリンピックで使われることを前提にした開発など、デジタルならではのカメラの発展スタイルをそこに見ることができる。

そしてもうひとつ、デジタル以上に気炎を吐いているのは、instax miniのチェキフィルムを使うインスタントカメラの好調さだ。

会場では毎回撮影コーナーが設置されているが、 Wideに加え、Future Standardとして"SQUARE"サ イズ、さらにこの時期からはMONOCHROME も加わっている。またカメラのバリエーションも豊富で、さまざまな仕様のボディが展示され、その勢いをうかがい知ることができる。

その好調さを裏付けるように、ライカカメラ社がゾフォートを売り出すわけだが、すでにロモ社が富士のインスタントフィルムを使うカメラを発売しているので、instax miniフィルムの売り上げはますます増加するのだろう。そして会場で目についたのは、ポラロイドのバッグを持った人が、富士とロモのインスタントカメラのコーナーに必ずいることで、インスタントカメラを重点的に注目するユーザーが複数存在するということだ。



GFXの各部。外付けEVFは、まるで取り外し可能なペンタプリズムのような感じでデザインされている



オリンパスは、フルサイズ⇒ APS-C ⇒マイクロ 4/3 と小型・ 軽量化できることをアピール(プレスカンファレンスにて)



展示ブースには OM-D E-M1 Mark Ⅱの実機展示はなかった

# ●オリンパス

今回のフォトキナにおけるオリンパスの新製品 発表はかなり力の入ったものとなり、ケルンメッ セ会場から離れた独自の場所で行われた。

発表会の初めには、フルサイズ、APS-C に対するマイクロ 4/3 の小型・軽量化での有利さを述べたのちに、オリンパスが発表したのはミラーレス機のフラッグシップ機となる「OM-D E-M1 Mark II」で、2,037 万画素、AF・AE を追随させて 18 コマ/秒の高速連写を誇り、4 K 動画にも対応する。

特にAFは、位相差とコントラスト検出を効果的に併用し、像面位相差の測距点は121点で、そのすべてがクロスタイプとされている。さらに完全無音の静音モード、深度合成モードなども搭載し、単なる小型機でなく、そこを超えた形でマイクロ4/3 規格ならではの新しい性能を引き出しているところが注目される。

発売は年内と伝えられているが、フォトキナ会場では、OM-D E-M1 Mark Ⅱの実機展示はなく、立体ディスプレーによるバーチャルイメージに終わった。交換レンズとしてM ズイコーデジタルED12-100mmF4IS PROも発表された。



オリンパスの展示ブース



オリンパス OM-D E-M1 Mark I 実機をゲストルームで拝見

#### ●パナソニック

今年はパナソニックがルミックスブランドのデジタルカメラを手がけて15周年だ。最初のモデルは2001年に発売されたDMC-F7とDMC-LC5で、いずれもライカブランドのズームレンズを装着してのスタートだったが、その姿勢は現在まで変わらない。特に会期前日の19日に開かれたプレス発表会には、ライカカメラ社の社主であるDr.アンドレアス・カウフマン氏を招いて、冒頭にその関係



ルミックスのヨーロッパ市場におけるシェアを解説



ライカカメラとパナソニックの結びつきについて話すライ カカメラ社主の Dr. アンドレアス・カウフマン



2017年に発売予定のルミックスGH5

について語ってもらい、ライカカメラ社との協業 がうまくいっていることを印象づけた。

フォトキナ時の新製品は、ミラーレス一眼として 1,600 万画素、レンズ側とボディ側の 5 軸デュアル手ブレ補正、電磁駆動の低振動シャッター搭載、4Kフォトの「G8」、レンズ非交換のコンパクト機としては 2,010 万画素、1型センサーで 24 ~ 72mmF1.4-2.8、3倍ズームの「LX9」、同じく 1型センサーを使い 206倍ズーム 24 ~ 80mmF2.8-4.5 を搭載した「FZH1」の 3機種であるが、ハイエンドハイブリッドミラーレス機という名のもとにルミックス史上最高画質で、4Kの動画を 60 コマ/秒で 4Kのままプログレッシブで吐き出す機能、高画質 4: 2: 2 10bit カメラ内記録、4K フォト 60 連写(8M)、6K フォト 30 連写(18M)を可能とする「GH5」を 2017 年の春発売予定として開発発表した。

また、ライカ DG バリオエルマリート F2.8-4 ズームレンズシリーズとして 8~18mm、12~60mm、50~200mm を 2017 年以降順次発売していくという。そして、最も注目されるのは 2020 年に向けた技術展開だ。それによると、2015 年:4 K フォト(8.3Mpix30fps)  $\Rightarrow$  2016 年 4 K フォトの進化(60fps)  $\Rightarrow$  2017 年 6 K フォト(18Mpix)  $\Rightarrow$  8 K フォト(33Mpix)

⇒東京オリンピック、というスケジュールが発表



モデルさんを使ったルミックスの実機を触れる撮影コーナーは人気だ。もちろん他社カメラの持ち込みも0K

されていることだ。

これに関しては、富士フイルムも同じように東 京オリンピックを目途にカメラ開発を行っている ことを発表している。パナソニックと富士フイル ムの間にあるのは2016年の2月にパナソニックが 発表した富士フイルムの有機薄膜を用いた有機 CMOS イメージセンサーの協調関係があるが、いま 現在詳細は不明。パナソニックのスケジュールに よると、明らかに東京オリンピックが明確に視野 に入っているようだが、パナソニックとしては動 画なのかスチル画像なのか、リオデジャネイロオ リンピックで使われたキヤノン、ニコンの一眼レ フフラッグシップ機に対し、ミラーレス一眼のパ ナソニックと富士フイルムがどのように報道用カ メラに食い込むのだろうか。今後その点が明らか になってくると、デジタルカメラの新しい飛躍的 な展開がなされることになるが、興味ある点だ。

#### ●リコー

すっかりリコーのカメラブランドとして定着したペンタックスは、2016年はすでに念願のフルサイズ機「K-1」を発売し、フォトキナ直前には「K-



リコーのブースはシータとK-1がきれいに分かれた展示だ



リコーシータの360°画像をゴーグルを使って見られる



中判デジタルX1D がメインのハッセルブラッド社ブース

70」を発売している。どちらも価格的には従来の他社同等機より低価格とした戦略機で、ファンには好評をもって迎えられている。

とはいっても何か新製品はと聞くと、K-1 用のファームウェアアップしかないということで、会場では「シータ」と「K-1」がみごとに展示エリアを折半していて、シータで撮影した  $360^\circ$  画像をゴーグルで見せるコーナーも設けられていた。

## ●ハッセルブラッド

ハッセルブラッド社は、今回のフォトキナでは他社に先駆けて新製品としての中判ミラーレス機である「X1D」を6月に発表し、9月に発売を開始している。5,000万画素43.8×32.9mmのCMOSセンサーを搭載し、トップカバーには「HAND MADE IN SWEDEN」と刻印され、スウェーデンのハッセルブラッド社製のボディであることが強調されている。交換レンズは、日本の日東光学製であることも発表されている。2012年のフォトキナではソニーNEXの着ぐるみのような"Lunarカメラ"を発表していたが、改めてミラーレス中判という基本に立ち返る考えで新規まき直しを図るようだ。



シャオイテクノロジーのブース。「Yi M1」カメラに  $12 \sim 40\,\text{mm}\,\text{F}\,3.5-5.6$  ズームレンズを装着して撮影。 $Ex\,\text{if}$  データを読むと、メーカー名: $X\,\text{IAOYI}$  、モデル名:M1、レンズ: $X\,\text{IAOYI}$  12  $\sim 40\,\text{mm}$  F3.5-5.6、 $5184 \times 3888$ 、 $12\,\text{mm}$ 、プログラム AE、1/100 秒、ISO 640、などと記されていた



ボディカラーはシルバーとブラックがあり、このようにボディと2本のレンズが化粧箱にセットされ発売される



交換レンズを外したところ。マイクロ4/3 規格のカメラであるから他社と大きく変わるところはない

### ● Yi M1 ミラーレスデジタルカメラ

今回初めて登場した中国のシャオイテクノロジー(YiTechnology)社のYi M1というマイクロ4/3規格のカメラ。ソニー製の2,000万画素CMOSイメージセンサーを使い、4K30fpsの動画に対応し、Wi-Fiなども装備している。関係者によると、オリンパスとパナソニックの手を借りずに独自に旧三洋デジタルイメージング社の関係が設計した



シグマのブース



マグネシウム合金とカーボンファイバーを使い軽量化を 目指したシグマ500mmF4 DG OS HSM Sports

とされるが、製造は中国で行われるようだ。 YiTechnology 社はHPを見るとアクションカメラや ドローンなど先端映像機器も扱っている。

## ●シグマ

シグマの新製品は、7月に発売された「sd クアトロ」カメラが一段落したこともあり、この時期は交換レンズとしてシグマ85mmF1.4 DG HSM Art、 $12\sim24$ mmF4DG HSM Art、500mmF4 DG OS HSM Sportsの3本で、加えて日本でフォトキナ直前に公開されていたシネ用レンズ20mmT1.5、24mmT1.5、35mmT1.5、50mmT1.5、85mmT1.5、18~35mmT2.0、 $50\sim100$ mmT2.0、24~35mmT2.2の8本が発表された。いずれもスチル用のArtラインの光学系をシネ用に転用したもので、4K、8Kに対応し、コストパフォーマンスの高さも特徴としている。



タムロンのブース



AF 性能を向上させて新 SP シリーズに加わった、望遠ズームのタムロン SP150 ~ 600mmF5-6.3Di VC USD G2

スチル用の85 mmF1.4 DG HSM Art はカールツァイスのオータス85 mmF1.4 に範をとり、性能の高さに加え、価格は1/2 程度を目指すという。また500 mmF4 DG OS HSM Sports は、鏡筒部材をマグネシウム合金、フードはカーボンファイバーにして軽量化を図っており、手持ち撮影も可能だ。

いずれもフルサイズの高画素センサーに対応させるには、大きく重くなるという現実があるが、マグネシウム製鏡胴は軽量化が図れるため、今後は他のレンズにも採用の幅を広げていくという。なおニコン用には電磁絞りを採用し、完全電子マウント化にして、高速連写時のAEの安定性向上を図っている。価格は80万円とされる。

#### ●タムロン

タムロンのこの時期の新製品は望遠ズームの SP150~600mmF5-6.3Di VC USD G2だ。タムロンは、2015 年から SP35mmF1.8、SP45mmF1.8、SP90mmF2.8、SP85mmF1.8と新 SPシリーズを発売してきたが、いずれも単焦点だったのを、新 SP150~600mmF5-6.3G2の投入で、ズームレンズへも新 SPシリーズとして展開することになった。



ケンコー・トキナーのブースは Kenko、Tokina、Cokin、HOYA、SLIK を打ち出している。Cokin はフランスの会社



大判関係はHORSEMAN の名の下にケンコー・プロフェッショ ナル・イメージングとして独立したブースをだした







もともとタムロンには SP150  $\sim$  600mmF5-6.3 があったが、光学系を改良し、AF 性能を飛躍的に向上させて、新たに 2 倍と 1.4 倍のテレコンバーターを加え、新 SP レンズとして発売されることになった。 SP150  $\sim$  600mmF5-6.3 は、昨今のネイチャーフォトやスポーツフォトの人気に支えられ、メーカーレンズをしのぐ勢いで売れたヒット商品として知られていた。

新 SP レンズはデザイン的にも一新され、マウント基部には金色のリングを付けて差別化を図っている。また、SP150~600mmF5-6.3Di VC USD G2は、先に発売された SP85mmF1.8 と同様に、ニコン用では、他社に先駆けて電磁絞りを採用して、完全電子マウントを達成しているのも特徴だ。

## ●ケンコー・トキナー

ケンコー・トキナーは、フィルター、三脚など 幅広い分野を手がけるが、ここではそのうちの一 部の交換レンズを主に紹介する。

交換レンズでは「トキナーFirin 20mmF2」という新名称でソニー $\alpha$ 7用FEマウントレンズを発表した。このレンズはマニュアルフォーカスだが、ソニーFEマウントとしたところが注目される。

実は今回各社の新型レンズを試してみたいと考



【フィリン  $20\,\mathrm{mm}\,\mathrm{F}\,2$  でフィリン担当の高橋光太郎氏を撮影】 絞り  $\mathrm{F}\,2$  開放、 $1/80\,$  秒、AWB、 $180\,$ 100、 $\alpha$  7R

えてソニー $\alpha$  7R をボディのみ持参した。なぜソニーボディかというと、小型で持参にあたり場所をとらないことと、明らかに中国のレンズメーカーを含めこの時期一気にソニーFE マウントの採用が増えているからだ。

最初に使わせてもらったのが、このFirin 20mmF2で、絞り開放で撮影したがシャープだ。このレンズは、絞りリングをクリックありとなしに設定でき、シネ用レンズとしても使えるように配慮されている。まさに時代を反映している。

また、ケンコーとして初めてミラーレス用マウ



ツァイス恒例の大型レンズ模型のショーケース



ツァイスのiPhone用のコンバーターレンズ

ントアダプターを販売することになった。特徴は日本製らしく精度を高く仕上げたという。ケンコーはもともと各カメラに対応させたTマウントアダプターを販売していたが、新たにソニーFE、フジX、マイクロ4/3などを加えたことになる。

そして会場内を歩いていてびっくりしたのは、「HORSEMAN」のブースがケンコー・トキナーとは独立したところに設けられていたことだ。最初はホースマンが再独立したのかと思ったが、たまたまなかにいた駒村商会の駒村利之社長に聞くと、ケンコー・プロフェッショナル・イメージングのブースだというので、納得した。

# ●カールツァイス

カールツァイスといえば、かつてはヤシカ・コンタックスの交換レンズであり、ソニーのデジタルカメラ、ビデオなどの光学系に使われているが、現在ではツァイスとコシナが販売したりといろいろだ。この時期にはシグマが85mmF1.4Artを設計するにあたり、オータス85mmF1.4を模範にしたというように、いまもなお厳然としたものがあるのがカールツァイスのレンズだ。

フォトキナでの新製品は、マニュアルのキヤノ ン/ニコン用 Milvus 15mmF2.8、18mmF2.8、135mmF2



ZEISS VR ONE Plus ゴーグルの実演コーナー



とマニュアルのソニーFE 用のLoxia 85mmF2.4、シネ用LWZ.3  $21 \sim 100mm/T2.9 - 3.9$  Tなどだが、iPhone 用のコンバーターレンズ、バーチャル映像用の ZEISS VR ONE Plus ゴーグルなども展示された。

ブースには、恒例のレンズの大型模型が設置された。今回の模型の元となったのはオータス85mmF1.4で、やはりこのレンズは現在のツァイスレンズを象徴するものなのだろう。オータス85mmF1.4の正式名称は、アポ・プラナー85mmF1.4であり、模型はかなり正確に作られていて、Madein Japanというところも克明に記されている。

## ●フォクトレンダー

会場に「フォクトレンダー」と「コシナ」というブースはない。コシナのフォクトレンダーレンズは、ドイツの写真材料商組合である「リングフォト」のブースに飾られている。

今回の展示では、マクロ・アポ・ランサー65mmF2がソニーFEマウントで参考展示されていた。外観は鏡胴ヘッドに高度に色補正されたアポ・ランサーの意味を示すR.G.B.のラインが刻まれている。まだ試作であるために外観デザインは今後変更されるという。

その他、ヘリアー・ハイパー・ワイド10mmF5.6



ع = 3 をは、ボッティングスコープが並ぶ興和のブース、x = 3 でイクロ 4/3 用プロミナーレンズ、x = 3 をじょーケースのなかには、かつてのフィルムカメラ時代の興和製のカメラである、カロフレックス、ラメラ、コーワ x = 3 などが並べてある



フェーズワンブースにて。魯カンボ(CAMBO)、甸フェーズ ワンカメラとレンズは、かつてのマミヤ 6 4 5 D の流れをくむ

用の外付け光学ファインダーが初めての公開で、すでに国内で発表されていたヘリアー・ビンテージライン50mmF3.5、ノクトン58mmF1.4SL IISもフォトキナ新製品となる。なお、ツァイスの0tus(オータス)、Milvas(ミルバス)はコシナによるものだが、展示はカールツァイスブースで行われた。

## ●興和

1970年代まではコーワ シックスなどのカメラをだしていたが、現在ではスポッティングスコープや双眼鏡などが知られている。2014年フォトキナにてマイクロ 4/3 用のマニュアル交換レンズのプロミナー  $8.5 \, \text{mm}$  F2.8、 $12 \, \text{mm}$  F1.8、 $25 \, \text{mm}$  F1.8を発表したが、2016年7月にはそれら鏡胴をシネ仕様としたコーワシネプロミナー  $8.5 \, \text{mm}$  T3.0、 $12 \, \text{mm}$  T1.9、 $25 \, \text{mm}$  T1.9の3本をブラックとゴールド仕上げで発売している。

#### ●フェイズワン

フェイズワン (PHASE ONE) ではすでに発売している 1 億画素の中判デジタルカメラシステムに対応させるため、「フェイズワンレンズ」 AF28mmF4.5、AF35mmF3.5、AF45mmF2.8、AF80mmF2.8、MF120mmF4、AF120mmF4、AF150mmF2.8、AF75~150mmF4の8本と「シュナイダーレンズ (Schneider)」 LS28mmF4.5、



サムヤンのブース。やはり前面に打ち出されていたのは AF対応になったことだ

LS35mmF3.5、LS55mmF2.8、LS80mmF2.8、LS110mmF2.8、LS120mmF4、LS150mmF3.5、LS240mmF4.5、LS40  $\sim$  80mmF4、LS75  $\sim$  150mmF4、TS120mmF5.6の11本をラインナップした。

フェイズワン社は2015年10月にマミヤ・デジタル・イメージングを吸収しマミヤの光学機器事業の一切を継承しているが、今回のフォトキナブースで、マミヤ名は見ることはできなかった。

#### ●サムヤン

いまもっとも成長著しい交換レンズメーカーは 韓国のサムヤンだといわれている。たしかにその 通りで、フォトキナでの展示ブースも年々拡大さ れている。今回の注目は、従来サムヤン(SAMYANG) の交換レンズはすべてマニュアルフォーカスで あったのを、50mmF1.4FE、14mmF2.8FEの2本をAF 仕様としたことだ。それも共にソニーマウントで あったので、どちらもAFで試用させてもらった。

このほか、PremiumMF として 14mmF2.4 をキャノンEF、ニコンF、ソニーEF 用に、85mmF1.2 をキャノンEF 用に発表している。さらに"XEEN"という別ブランドで、シネ用レンズ 6 本を新製品として展示していた。日本では、ケンコー・トキナーが代理店になっているので、CP+2016 の会場では同社の展示ブースの奥にサムヤンのコーナーがあった。



**魯サムヤン AF50mmF1. 4FE、 園 AF14mmF2. 8FE** 



【サムヤンAF50mmF1.4FEの絞り開放でサムヤンスタッフを撮影】絞りF1.4 開放、1/200 秒、AWB、IS0100、α7R

### KIPON

日本ではKIPONブランドのミラーレス用マウントアダプターの製造元として知られているが、正式にはShanghai Transvision Photographicという会社だ。すでに日本のCP+にもここ数年出展しているが、マウントアダプターから交換レンズへと取り扱い商品を拡大している。

交換レンズは、ドイツの Hande Vision 社で設計して、中国で製造しているようで、この時期は IBERIT (イベリット) シリーズとして最大口径 F2.4で、単焦点で24mm、35mm、50mm、75mm、90mm の4 本をそろえている。鏡胴はブラックとシル



KIPON (Shanghai Transvision Photographic)  $\sigma \vec{\jmath} - \vec{\lambda}$ 





【イベリット 24mmF2.4 の絞り開放でソニーブースのモデルさんを撮影】絞り F2.4 開放、1/80 秒、AWB、IS0100、 $\alpha$  7R

バー、マウントは、ソニーFE、フジX、ライカMの 3 種類で、ライカMマウントは距離計に連動する。 基本的には、ライカのズマリットシリーズにならったものだそうだが、24mm はライカにはない焦点距離だ。24mm、35mm を使ったが写りはいい。

### ●ラオワ

LAOWA と書いてラオワと読み、老蛙と書く。中国安徽省にあり、Anhui Changgeng Optics Technology Co., Ltd. (Venus Optics) の交換レンズとしての商品名が「ラオワ」なのだ。この会社は2013年にマクロ写真愛好家のグループ自らがレンズ設計し、製作する新しいレンズメーカーだとい



LAOWA のブース



患ラオワ15mmF2 Zero-D、働ラオワ105mmF2のSmooth Trans Focus



【ラオワ15mmF2 Zero-Dの絞り開放でブースカウンターで 撮影】絞りF2開放、1/80秒、AWB、IS0100、α7R

う。社名である Changgeng は中国の古詩に、Laowa は毛沢東のカエルの詩から名付けられたという。

ラオワは、2015年1月に60mmF2.8 2×Ultra Macro、15mmF4Wide Angle Macro、2016年3月に105mmF2 Smooth Trans Focus、6月に12mmF2.8 Zero-Dを発売し、2016年12月には15mmF2 Zero-D、7.5mmF2 MFTの発売を予告している。日本では、ケンコー・トキナーの傘下にあるサイトロン・ジャパンが正規輸入代理店である。

いずれもマニュアルフォーカスだが、光学的に特徴をもたせたレンズで、105mmF2 の Smooth Trans Focus はアポダイズド光学系を組込み美しいボケ味をだし、Zero-D はディストーション・ゼロを意味する。このうち、7.5mmF2 MFT はマイクロ 4/3 用、その他はフルサイズ用で、キヤノン、ニコン、ソニーA、ペンタックス K、ソニーFE が用意されている。ペンタックス K 用が加わり、15mmF2 Zero-D はソニーFE 用だけとなっているのも注目される。15mmF2 と 105mmF2 を使ってみたが、写りはいい。

## ●ゼニット

旧ソ連時代のクラスノゴルスク機械工場(KMZ)の流れをくむZENIT(ゼニット)だが、現在は医療、宇宙、天体、照明、など幅広い光学機器・材料を扱うShvabe(シャーベ)グループの一員だ。

写真用レンズとしては、Zenitar (ゼニター)、 Herios (ヘリオス) があるが、ここ数年来は旧ソ



シャーベのブースには、ゼニットレンズほか、シネレン ズ、硝材、光学フィルターなど幅広く展示されていた



ゼニットの新レンズ。魯 Zenitar50mmF0.95 (ソニーFE)、 働 Zenitar50mmF1.2 (ニコンF、キヤノンEF)

連時代のレンズデザインを継続してフィッシュアイ8mmF3.5、16mmF2.8、20mmF2.8、28mmF2.8、50mmF1.2、50mmF2、58mmF2、85mmF1.5、85mmF1.4、AP0135mmF2.8を製造していたが、この時期には外観デザインを一新して、Zenitar50mmF0.95(ソニーFE)、Zenitar50mmF1.2(ニコンF、キヤノンEF)、Zenitar85mmF1.2(ニコンF)を新製品として展示した。いずれもマニュアルフォーカスだが、最近のトレンドである50mmF0.95大口径をソニーFEマウントでだしてきたことが注目点だ。

# ●その他のレンズメーカー

Meyer Optik Gorlitz は、1896 年にHugo Meyer によりドイツのGorlitz に設立された今年で100 年を迎える名門の光学メーカーだ。1986 年に東独のペンタコンに吸収され一時は途絶えたが、フォトキナ2014 で再登場している。このときは、80mmF1.8 と85mmF1.4Somniumの2本だったが、今回はFigmentum35mmF2、同85mmF2、Plimoplan58mmF1.9、同75mmF1.9、Noctarnus35mmF0.95、同50mmF0.95、Trimagon95mmF2.6、Trioplan50mmF2.9、Trioplan100mmF2.8(シルバー、チタン、ゴールド)とラインナップを広げ、マウントもニコン、キャノ



メイヤーレンズの展示はささやかだが、この2年間の間に商品のラインナップを大幅に広げている



香港美科デジタルテクノロジー社

ンに加え、ペンタックス K、ライカ M、ライカスクリュー、ソニー FE、フジ X などと幅を広げている。いずれもドイツ製で手作りであることを特徴としている。今回の展示は、独自ではなく販売店ブースのショーケースを借りた感じだった。

Honkong Meike Digital Technology 社は、Meike 12 mmF2.8 超広角レンズと 8 mmF3.5 フィッシュアイレンズの 2 本を展示していた。 12 mm は APS-C 用で、8 mm はフルサイズをカバーし、いずれもキヤノン、ニコン、ソニーE、フジ X、マイクロ 4/3 用に対応。Meike は美科と書く。このほかに、APS-C 用に 28 mmF2.8、35 mmF1.7 を扱っていて、LED リングライト、マウントアダプター、中間リング、ストロボ、バッテリーグリップ、リモコン、ビューファインダーなどをラインナップしている。

中国の ShenZhen YongNuo Photographic Equipment 社は、一眼レフ用交換レンズ YN35mmF2 (キャノン/ニコン用)、YN50mmF1.8 (キャノン/ニコン用)、YN100mmF2 (キャノン用)を出品。このうち35mm と50mm は日本のアマゾンで発売中なので、100mm が新製品なのかもしれない。いずれもAF 対応で、デザインがキャノン、ニコンにそれぞれ似



ShenZhen YongNuo Photographic Equipment 社のブース。 左に大きくプリントされた100mmF2 は新製品のようだ



外観デザインがキヤノン、ニコンにそれぞれ似ている

ている。このほかテレコンバーター $1.4 \times$ 、ストロボ、LED ムービーライトなども扱っている。

交換レンズ関係の出展社は、ここに書き出したのがすべてではないと考えられるが、昨年出展のあった中国の中一光学(ZHONG YI OPTICS)は、今回出展していなかった。また、ミラーレス機の登場によるマウントアダプターについて当初はこれらをすべてピックアップするつもりであったが、実に多数の企業から出品されているのであきらめた。

# ●銀塩感材関係

今年の夏ごろ若い人にフィルムカメラが人気だと一部のマスコミで騒がれたが、実際はどうなのだろう。少なくとも富士フイルムの項で紹介したinstax miniのチェキフィルムを使うインスタント写真が好評なのは間違いない。インスタント写真へのファンはたくさんいるようで、会場ではポラロイドブースでもらったバッグを肩にかけて、富士フイルム、ロモ、インポッシブルなど、インスタント写真に関連しているブースを周っているだろう人が多いのが目についた。そこにライカカメラ社がゾフォートを発表したが、一般ユーザー



ロモのインスタントカメラコーナー



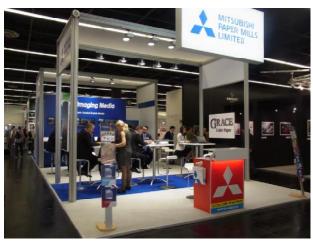
インポッシブル社にはカメラの新型が登場

にはまだ認知されていなかったこともあるが、ゾフォートはガラスケースの中に置かれているだけであったためか、評判はほとんど聞けなかった。

銀塩感材という意味で最も大きなブースをだしていたのは、日本の三菱製紙だ。それも、インクジェットペーパーのキャンソン、フェリックス・シェラーの隣で銀塩のGraceカラーペーパーを前面に打ち出してというのがすごい。

インポッシブル(IMPOSSIBLE)は、2008年にポラロイド社が倒産後、オーストリアでスタートした旧ポラロイドフィルムを作るために作られた会社で、世界に約1億台あるという過去に生産されたポラロイドカメラを稼働させるために、元ポラロイドのフィルム技術者を招いて、旧ポラロイドのオランダ工場でフィルムを製造開始している。ポラロイドという名称は他社が権利を持っているために使えなかったので、インポッシブルを使用。

現在では、SX-70、600 シリーズ、 $8 \times 10$  モノクロも再生している。展示ブースでは、これらの紹介と、ピールアパートフィルムによるイメージトランスファーの実演を行っていたが、最近は600タイプカメラ用フィルムを使う「THE I-1 (アイ・ワン)という新しいカメラも登場させている。



三菱製紙のブース



インポッシブルのポラロイド規格フィルムも増えた



アドックスの黒白リバーサルフィルム SCL A 160 BW。現像後にスキャンして使用するデジタル時代のフィルムらしい

通常の黒白フィルム、印画紙、薬品となると 1860 年創業のベルリンの ADOX (アドックス、www. adox. de) は、大判フィルム用の低感度密着印画紙 LUPEX (255g、バラ板)、黒白リバーサルフィルムの SCLA160BW、 $4 \times 5$  シートフィルム現像タンクを新製品として展示。

チェコ共和国の**FOMA** (フォマ、www.foma.eu) は 創立が1921年、今年で95周年を迎える。135の黒 白ネガFOMAPAN 100/400、黒白リバーサルの

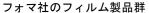


フォマ社のブース



フィルムのローライ社ブース









ローライ社のフィルム製品群

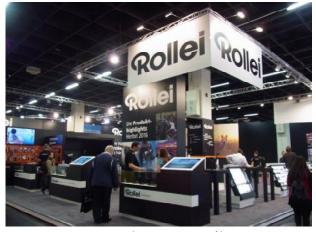
FOMAPAN 100R、16mm リバーサルの FOMAPAN R、黒白印画紙 FOMABROM などのほか、歯科用フィルム、薬品などを製造している。

ローライ (Rollei) は、かつてはカメラを製造していたが2014年には倒産し、2016年フォトキナで見ると、フィルムを販売する会社と、フィルターを販売する会社がある。どちらもRolleiというブランドを継承するものの、直接的にかつてのフランケ&ハイデッケ社とは関係ないはずだ。

フィルムのローライは、フォトキナのブースではRollei GmbH & Co. KG となっているが、パンフレットでホームページ (www.maco-photo.de) をた

どっていくと、HANS O. MAHN GmbH & CO. KG、MACO PHOTO PRODUCTS というところに行きつく。それによると、2004年にローライフィルムをマコが作り始めたことになる。現在ローライフィルムは、黒白パンクロ、オルソ、スーパーパン、赤外、カラーネガ、カラーリバーサル、などのほか、サイズも135、135mm長巻、120、4×5シートなど幅広くそろえられており、黒白バライタ印画紙、各薬品なども販売されており、一般用途として最も品数が豊富なフィルムブランドとなっている。

ILFORD Imaging Europe (イルフォード・イメージング、ドイツ) は、1879年にイギリスで設立さ



フィルターのローライ社



イルフォードイメージング社のブース



アワガミファクトリー (富士製紙企業組合) のブース

れた旧イルフォード社の流れをくむインクジェット用紙を製造・販売する会社である。今回のフォトキナでは、インクジェットペーパーに鳥の子和紙を使った「ILFORD GALERIE WASHI TORINOKO」、オリジナルのインクジェットペーパーを作れる「ILFORD GALERIE Creative Emulsion」、熱染料昇華型でA4・A3までの光沢かマット仕上げのパネル写真を製作できる「ILFORD ILFOCHROME」システムを発表した。なお、旧イルフォード社の流れをくみ、現在もイルフォード(ILFORD)名で黒白フィルム、黒白印画紙を製造・販売するのは、イギリスのHARMAN technology社だが、前回は出展していたが、今回は見当たらなかった。

インクジェットペーパーでは、欧米ならびに中国のメーカーが多数出展しているが、日本の**アワガミファクトリー**(富士製紙企業組合)は、プラチナプリント用に手すきの雁皮紙を使った作品を持ち込み、欧米の作家に好評であった。

銀塩感材関係は、このほかにテテナール (TETENAL、ドイツ)、ベルリーニ・フォト (BELLLINI FOTO、イタリア) など、写真薬品の会社をいくつ か見ることができたが、例年出展していた中国の ラッキーフィルムは見つけることはできなかった。 Shen Hao シェン・ハオ(www. shen-hao. com)と 読むのだろうか、中国上海にある、1994 年に創業した大判カメラのメーカーだ。一見するとディアドルフかエボニーのようであるが、黒クルミの木とアルミ合金を使ったウッドビューカメラであり、そのフォーマットも、 $6\times 9$ cm、 $6\times 17$ cm、 $6\times 24$ cm、 $4\times 5$ ″、 $5\times 7$ ″、 $5\times 8$ ″、 $4\times 10$ ″、 $8\times 10$ ″、 $5\times 12$ ″、 $7\times 17$ ″、 $11\times 14$ ″ と 12 種類あり、さらにさまざまなタイプに分かれている。

ここまで、ウッドビューカメラを品ぞろえしてこれからどうなるのかとも考えたが、それぞれのフォーマットに合わせて、デジタルカメラを装着するアダプターが用意されている。マウント種類も、ペンタックス K、ニコン、キヤノン、フジ X、ソニー A、ソニー FE、ハッセル、マミヤ 645、コンタックス 645 などがあり、デジタルカメラボディ、デジタルカメラバックに対応させている。その他、各フォーマットに応じフィルムの撮り枠、リンホフ、ジナー、カンボ、トヨ、ホースマン用の標準蛇腹、袋蛇腹なども製造している。かつてはアメリカの写真家ジョン・セックストンも使っていたようだが、その商品幅の広さには驚く。

近くのブースには、 $8 \times 10$ ″のピンホールカメラが置かれている。樹脂成型だが、価格は350ドルぐらいだという。中国製品は奥が深い。

# ●写真産業の行方

「Imaging Unlimited」とは今回のテーマだが、確かにイメージングの分野はさまざまに広がる可能性は十分にある。そういう視点から今回の展示された製品から動向を見てみると、シネ用レンズの新製品が各社から相次いだ点が注目された点だ。この分野では、すでにカールツァイス、キヤノン、富士フイルム、ライカカメラ、ゼニット、シュナイダー、ケンコー・トキナーなどに加え、シグマ、サムヤン、興和などが新たに加わったわけだが、



園シェン・ハオ  $8 \times 10^{\prime\prime}$  ウッドビューカメラ、 $⊕ シェン・ハオ <math>4 \times 5^{\prime\prime}$  ウッドビューカメラ、 $⊕ 8 \times 10^{\prime\prime}$  ピンホールカメラ



フォトキナ事務局が設置した 3 6 0 ° シネマコーナーで、 いすに座って V R ゴーグルをかけ 3 6 0 ° 動画を見る人たち



クールジャパン。会場内に設置されたDNPのマンガプリ クラマシンの前にはいつも若い人たちが列を作っていた

そこにあるのは交換レンズ企業が事業を拡大したのも事実だが、明らかにそれ以上に一眼レフとミラーレス機によって本格的な動画撮影が手軽に行われるようになったことだ。そして以前は高価であったシネ用カメラが、レッド、ブラックマジック、一眼レフ、ミラーレス機などの出現により、価格が大きく下がったのと同じように、特殊価格帯にあったシネ用レンズが、これからは一般的な価格になるのではないかと考えられる。

また360°カメラ、ゴーグルによるVR映像なども新しい分野として注目されており、今回のフォトキナ会場でもいくつか見ることができた。

ゴーグルによる映像は、フォトキナ事務局の展示を始め、ニコン、リコー、カールツァイス、一部中国企業などに見ることができたが、数年来見てきたアメリカ CES での盛り上がりとはまったく別の感じを受けた。特にここ2年ほど CES の入口にはサムスンが陣取り、ゴーグルによる360° VR映像の前には列をなして観客が並んでいたのに対し、フォトキナではその熱気がない。残念ながらサムスンはカメラ事業から完全に撤退したために、今年からフォトキナには不参加だったが、もしサ



フォトキナシンボルゾーン。いままでは、大きな地球儀がつるされていて、床に写真プリントが貼り詰められていたが、今年からはデザインが一新された



会場の一画には額縁屋さんが多数出展していた。写真がどのようなプリント形式であっても飾ることは同じなのだ

ムスンが参加していたらどうだろうかとも考えるが、やはり写真とアミューズメント映像の客は、求めるものが違うのだと思わざるを得ない。

1980年にフォトキナに訪れたときは、入口近くはライカ、アグファ、コダック、ポラロイドなどの企業が占めていたのをおぼえている。そして、多くの業務用シネ機材、ビデオ機材メーカーなども出展していたが、いまはまったくそのような関連した商品の展示は見ることができなくなった。

産業が成熟すると、新しい分野が確立されるのだ。たとえば動画は、放送機材や映画関連の機材展のほうに出向くわけだ。つまりシグマやサムヤンが本格的に動画用としてシネレンズを売り込もうとすると、そちらの機材展に出展することになる。そのようにして、あるときはカメラや写真の派生技術として存在していた商品が、それぞれ独立して、新たな業界に進出していくことになる。

結果として、フォトキナは、より根幹となるカメラやレンズ技術の見本市となるのだが、今後 VR 映像技術はこの分野にとどまることができるのだろうか。むしろさまざまな分野へと分散していくことが、写真産業の進化発展だと考える。